

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)

実施報告書

HT26094 みんなで学ぼう！身近で使われている「アフリカの農作物」



開催日：平成26年7月27日(日)

実施機関：東京農業大学
(実施場所) (国際農業開発学科2号館3階
共通利用室)

実施代表者：中曽根 勝重
(所属・職名) (国際農業開発学科・准教授)

受講生：高校生11名

関連 URL：

【実施内容】

1) 受講生にわかりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

① ほぼ海外渡航経験のないことが予想される受講生のために、写真や図表を多用した冊子を作成し、アフリカの生活の様子が少しでも分かりやすくなるよう工夫した。また、この冊子は講義にも利用した。

② 社会科学系、自然科学系の両方の研究成果、ナイジェリア・ウガンダ・ガーナ・マラウイへの渡航経験がある実施協力者との交流、実施者のアフリカでの調査研究体験などを伝えることにより、参加者の幅広い興味に応えるよう努めた。

③ 午後の講義には、温室や網室でイネおよびヤマイモを実際に触りながら形態学的な観察を行い、体験型となるよう努めた。また、十分な理解が得られるよう内容や時間配分に配慮した。

④ 高校生と年齢が近い院生や学生の補助者を多くし、親しみやすい雰囲気心がけた。

⑤ 実施者である教員だけでなく、留学生、院生、学生のアフリカにかける情熱を伝えられるよう、講義に加えて共同作業や昼食時などで、会話の機会を多くするように努めた。

⑥ すべての講義終了後、受講生全員から講義を受けて感じたこと、学んだことなどを発表してもらい、その後簡単なディスカッションの時間を設け、受講生の考えを引き出すことを予定していた。

2) 当日のスケジュール

9時30分～10時00分	受付
10時00分～10時15分	開校式(科研費の説明、参加者紹介、スケジュール案内、諸注意)
10時15分～10時50分	「アフリカを支える農産物」(講義)
10時50分～11時00分	小休憩
10時00分～11時35分	「アフリカのおもしろい地形と植物」(講義)
11時35分～11時40分	小休憩
11時40分～12時40分	「アフリカの園芸作物」(講義)
12時40分～13時30分	「バナナで多様性を学ぶランチ」 (アフリカ滞在経験のある研究者や学生との昼食)
13時30分～14時15分	「アフリカのイネとイモ①」(講義)
14時15分～14時25分	小休憩
14時25分～15時00分	「アフリカのイネとイモ②」(温室での実習)
15時00分～15時15分	閉校式(アンケート記入、未来博士号の授与、記念撮影)
15時15分	解散

3) 実施の様子

① 予定人数は25人であったが、参加希望者数は11人であった。

② 講義中、受講者へ問いかけ、内容の理解度を確認しながら進め、良い雰囲気の中でプログラムを進められたと思う。

③午前は主に座学の講義を行い、午後から温室での植物見学や実習など体験型の講義を行った。実習中は参加学生もさらに活発に発言するようになり、実際の植物に触れながら質疑応答を行うことで、参加者の知的好奇心を刺激できたものとする。

④講義の後に「アフリカで何をしたいか、何ができるか」というテーマでディスカッションを行う予定であったが、参加者の帰宅時に激しい雷雨が予想されたため、スケジュールを変更し、ディスカッションを中止して、閉講式を時間を繰り上げて行い、予定より45分ほど早く解散とした。

4)事務局との協力体制および広報体制

事前準備、当日ともに密接に連絡を取り合った。学科ホームページへの掲載や、関連高校への広報も十分に行えた。

5)安全体制

事前に打ち合わせを十分にし、当日も見守り、安全に実施した。

夕方に雷雨を伴う激しい雨が降るとの予報があり、開催直前の週にも同様の雷雨で電車が不通となる事態があったことから、参加者の安全と無事の帰宅を第一に考え、プログラムを一部省略し、閉講を早めた。しかし、天候は非常に不安定であり、大学の近くからバスに乗る参加者や、20分近く歩いて電車に乗る参加者など様々であったため、降り出した雨の中の速やかな帰宅を促すのではなく、豪雨が落ち着くまでの間待機したい受講生には、研究室の見学を行った。なお、以上の判断は、実施代表者、実施分担者、事務担当者に加え、当日参加していた日本学術振興会研究員および職員にも相談と確認をした上で決定した。

6)今後の発展性、課題

参加者の中には、高校卒業後の進路を既に決めている受講生から、まだ1、2年生で自分の興味ある分野を探している受講生まで、様々な受講生がいた。前者の受講生には、アフリカに関する知識をさらに深める場として、後者の受講生には学習意欲をかきたてる場として、今回のプログラムはとても有意義であったと考えられる。

広報については、学科ホームページ掲載に加え、関連校約90校にチラシを送付し、周知を求めた。しかしながら、後者のチラシ送付については本プログラム申し込みに結びつかなかった。また過去の広報実績をみてもチラシ送付による申込者は1～3名に留まり、反響の薄い方法であることが伺える。一方で口コミ、友人からの紹介といった方法は反響があることから多くの来場者が見込まれるキャンパス見学会における宣伝は有効であるとする。これまでキャンパス見学会実施前のプログラム開催であったが、今後、前述を踏まえたうえで、実施時期を検討していく必要がある。



温室での実習の様子(ヤムイモ形態調査)



昼食

【実施分担者】

入江 満美 国際食料情報学部・助教
真田 篤史 国際食料情報学部・助教
パチャキル・バビル 国際食料情報学部・助教

【実施協力者】 10名

【事務担当者】

鈴木 加奈子 エクステンションセンター事務室